

# 想



# 随

白い言葉だと思ふ。「罪」とは試みに辞書を引いてみると「悪い事、正しくない行い、犯罪、相手に気の毒な様子」etc.とある。とすると「罪人」とは、意識しないで相手を傷つけるような言動をする人とか、又はその気はなくて、時によると相手をからかって疑惑や悩みを抱かせる人、というふうな解釈しているものだろうか。逆に「罪を作る人」とはその被害者の側で、多くの場合一寸した人の噂とか、相手の曖昧な言動によって色々妄想を逞しくし悩み苦しむ状態をいうようだ。つまり前者の「罪人」とは相手に「罪を作らせた人」ということになる。

## 罪つくりな話

加藤 みゆき

よく「あの人は罪人だ」とか「罪を作る」とか言う。普断は何気なく使っているのだがこうして書いてみると一寸面

も十年以上も昔の事になるが、夫の船—その頃夫は貨物船の航海士であった—が神戸に入港した時の事である。待てど暮せど彼からの電話は一向に掛らない。他の点では兎も角、こんな事には大層几帳面な人なので、一体どうしたのだろうかと気掛りで仕方がない。天気都合で入港が遅れたのだろうか、いや此の頃は天気続きだったからそんな筈はない。もう確かに着いている筈だ。では何故知らせないのだろうか？もしかしたら夫には他に楽しいことがあってそれで妻に電話する事さえ忘れていたのでは；でもまさか—いえもしかしたら何か事故でも起っているのでは、と私の臆測は限りもなかった。が私の妄想はどれ一つとして当ってはならず、夫の船は確かに入港はし

ていたが船が多くて接岸できず沖待ちの状態でのどかに波間に揺られていたのである。その意味の電報の一通でも打ってくればこんな要らぬ気を揉まなくても良かったのにと後で夫を恨んだものであった。そんな意味でその時の夫は私に對してちょっぴり罪人を作った人であり、私は彼によって自ら罪を作ったことになる。一寸位の椿事には微動だにしない。最近の私にはそういう可憐な若妻時代もあったのかと懐かしくさえおもわれ「一酌」もある。

(主婦・文芸八代同人)

手紙の返信—それも当然来るべき—の遅れとか約束の時間に遅れる事なども屢々そうした状態を作りだす。返信を待っている側では相手の上に色々不安な想像を走らせ時によるとんでもない飛躍した妄想さえでち上げて苦しんだりする。これも大いに罪つくりな事ではないだろうか。

お互いに相手を信じてさえいればそういうことは当然防げる筈だとはいってみてもそこが神ならぬ身の哀しさ一寸した風にも心揺ぐのが常ではなからうか。私も出来る限り「罪人」にもなりたくないし、「罪をつくる」側にも廻りたくない。唯でさえ傷つき易い人間同志なのだからできるだけ素直に気持ちを伝え合い労わり合って生きてゆきたいものだと思ふ。

## 健康マラソン

加地 正隆

昭和四十七年一月、十三名で結成された「熊本走ろう会」が、無鉄砲にも、一年後の昭和四十八年三月、全国壮年天草パールライン・マラソン大会を開催した事がつけ火となり、全国に、老壮マラソンが燎原の火のように拡がり、今では、全国各地に数百の同好会(走ろう会・クラブ等)が出現した。本県内にも、会員数十名位の小さいものから、百名以上の多数会員を擁する大きな会まで、既に、十数会が誕生して、着々とその実動に移っている現状です。

この様に、全国津々浦々まで、大きな波紋が拡がるだろうとは、当初は我々も予想しなかった。今では十万人以上の老壮年が、全国各地を走っているものと思われる。

ただ、左右の足を交互に、一步一步、単調に走る事が、どうしてこんなに盛んになったのだろうか。

それはやはり、自分の健康は自分で守

る。手つとり早く、簡単に、何時、何処でも、独りでも出来るという素朴さにあるのではないだろうか。

今や、この燃えさかっている焔が消える事はないであろうし、又、この社会運動は推進するに価値あるものであろう。我々「熊本走ろう会」も、老壮年の健康な精神・肉体を獲得することを、尊い使命として、続けて行きたいのである。

老壮年の最も理想的なマラソンの走り方は、毎日、三十分—一時間の持久走である。体力の限界を超えて全力疾走してオーバーヒートしてはいけない。一時間かけて約十キロ走る位が丁度よい。このペースだと、五十歳代の男子の全力疾走(百メートル競走時)の七〇%位の頑張りである。その発汗が見られる。そして一日に十キロ走ると、一ヶ月で三百キロ、一年で三千六百キロ、十一年で地球一周(約四万キロ)出来る。

十月三日には、体力作り全国大会が熊本で開催され、この発想より、全国老壮各クラブに呼びかけて、当日各地で、マラソン大会又は記録会を催してもらい、その走行距離を集計して、日本全国の同志により地球一周を走破する、という計画を進めています。人力で世界一周するなんて、ほんとすばらしい事ではありませんか。

勿論、初めから、五キロ、十キロを走る事は出来ないでしょう。最初は十メー

トル、二十メートルでも結構、段々とその走行距離を伸ばして行くことです。決して無理してはいけません。目的が健康増進であることを忘れないことです。

昔は、町の露地を小さく走って走っていた我々が、今日では、胸を張り堂々と走れるようになった事は、非常に愉快だ。さあ皆さん、一緒に一歩から始めましょう。そして、いつまでも、若く、強く、たくましく毎日を過しましょう。

昭和五十一年九月二十五日記 (熊本走ろう会会長)

## あるわらべ唄

から

荒木 三千夫

ひい、ふう、三、四の鶯が、梅の小枝に巣をはって、十二の卵を生み揃え、生み揃えて発つときは、一つ二つ三つ味憎こし、四つ嫁御。五つ医者どん、六つ響どん。七つ難儀の花ちゃんが、コレラの病気に罹るとき、花ちゃんのおっかさんな血の涙—血いじゃなかつた紅だった。

その子が四つになるときは、赤い袍を掲げさせて、その子が八つになるときは、学校生徒を引きつれて、帝国万歳万歳—。

「お早よう、あなたの県庁です」、RKKラジオの朝七時四十分。その呼びかけにはじまり、モーツアルトの木管三重奏の、爽やかに澄んだテーマミュージックにのって、月曜日からウィークエンドまでかかず、日々刻々の県政の動きを告知する、五分間のミニショート番組がある。月末近くの日を、そのテーマミュージックが山深い溪谷のせせらぎを思わせるハープの爪弾きが変わると、—誰もが幼い頃に、口ずさんだり、耳したわらべ唄—それはまた遠い日の、ふるさとの心の調べでもあるでしょう—というコメントが流れて、枕に引いたような、わらべ唄の、三、四曲がつづく。

まことに、わらべ唄とは、雛鳥の囀りようにかなしく、そしておかしく。三、四の鶯が十二の卵にかかったり、三つの味憎こしは、おどろに七つ難儀のコレラに、また、血の涙が、いつしかあえかな紅に転調し、はては帝国の弥栄万歳まで飛翔しかなないのである。

国政はもちろん、県政といったちたきものにも、いまや、なにかのとまどいははじまっているらしい。それを、当世モードの、まやかしのふるさと回帰におわらせてしまつては、にべもない。そんな志向を、たしかなものにするために、忘

れ去られ、失われゆくわらべ唄の掘りおこしなどから、まづは手を染めてみた。たとえば、さきのわらべ唄との出会いには、あの誰かが、「流民の都」と詠唱した県南の都市であった。だから、いまの世の、水銀禍を先読みしているようなコレラの暗喩が、「子どもとは、なんと巧まざる詩人であることだろう」といった、わらべ唄採集の学究のことばと重なったりもする。あやに愛しい、こんなわらべ唄のかづかづかは、きっと、それはいつの世にもいた、幼い拓郎や桂や、それに時子たちの綾とりから紡がれていたのだろう。それらは、だからどの唄もが、あのうす紅いろの願望のような、あどけなき、いじましさ、そしてはかなさをもつて、私たちになにかを問いかけてやまないのだ。

出会いといえは、その日、こんな唄のいくつかを思い出していただいた方は、梅下千鶴子さんという方だった。その頃は、明治末葉に、「千里眼の女」とよばれて一世を狂喜させた松合生れの薄倅の美女、御船千鶴子をテーマにした芝居づくりをかたえにやっていた。やがてきた上演の日、そのヒロインを慕う童女の幕開きのお手玉遊びに、私はそっとこの唄を歌わせていた。せわしく、とめどなく失われていくものへの、思慕をこめながら。なんと、梅下さんは、千鶴子とその血筋をひとしくする方であったのだ。

(熊本放送ディレクター)